

浮島沼西岸・沖田遺跡の調査からみた湖沼利用の推移

藤村 翔

はじめに

浮島沼とは 浮島沼は、現在の静岡県東部の駿河湾奥部の低湿地帯にかつて存在した湖沼であり、近世には富士沼などとも呼ばれ、富士講の霊場である富士八海(湖)の一つとして、また富士山を望める東海道の名所にも名を連ねていた景勝地である。江戸時代以降、たびたび湖沼の干拓計画が挙がるものの実現には至らなかったが、幕末から明治期にかけて増田平四郎や高橋勇吉らによって湖沼の水を駿河湾へと抜くための放水路が相次いで完成したことで、浮島沼は急激に縮小することとなった(写真1)。そして、昭和18年(1943)の昭和放水路、同38年(1963)の沼川放水路の完成をもって沼地はほぼ消滅し、以降、浮島ヶ原低地と呼ばれて今に至っている。

現在の浮島ヶ原低地は、西は富士川河口の扇状地、東は狩野川下流の扇状地性三角州までの間、東西約15km、南北平均約2.5kmに広がる海拔平均5m以下の低湿地である。約8,000年前以前には内湾であったが、富士川や狩野川が運ぶ砂礫によって田子浦砂丘が発達するに伴い、約7,000～6,000年前頃(縄文前期)には瀉湖(ラグーン)に、約6,000～5,000年前頃(縄文前～中期)には湾が完全に閉塞され、沼沢地・湿地化したことが埋没砂礫州の分析から明らかにされている⁽¹⁾。

沖田遺跡とは 沖田遺跡は、浮島ヶ原低地の西北端か

らその北側の丘陵末端部にかけて立地する、主に弥生時代～奈良・平安時代の集落跡・生産遺跡(水田)である。昭和38年(1963)の岳南排水路埋設工事によって、地表下3～7mから土器片や木製品が大量に発見されて以降、継続的に発掘調査が実施されており、その数は平成28年度末で156次にのぼっている⁽²⁾。沖田遺跡の低湿地部の遺物包含層や遺構面は少なくとも地表下3mより下部から検出されることが多いことから、その調査件数に比して本発掘調査は3件と少なく、遺跡の全容を把握するためには、膨大な試掘・確認調査の報告を紐解く必要がある。そうした調査実績を俯瞰した上での遺跡の評価は、中野国雄⁽³⁾や前田勝己⁽⁴⁾、若林美希⁽⁵⁾によって進められ、奈良時代以降は条里型畦畔によって区画された大規模な水田を有する生産遺跡として認識される一方、古墳時代には潤井川・沼川河口部に発達した天然の港湾(吉原湊)に直結する、情報やモノの玄関口としての機能があったことも佐藤祐樹によって想定されている⁽⁶⁾。

本稿の目的 本稿では、縄文時代以降の長きにわたって、駿河東部地域に居住した人々の生活に影響を与え続け、その文化的・技術的発達にも大きく寄与することのあったと思われる浮島沼について、主に西岸の沖田遺跡の調査履歴を纏めることからはじめ、限られた調査例からではあるものの、湖沼利用の時期的推移を素描することで、今後の調査進展の一助としたい。



写真1 吉原湊及び東海道図 (江戸時代末頃、長橋家蔵)

増田平四郎の放水路(スイホシ)以後の浮島沼を描く。江戸時代末以前は、沼周辺のグレー部分まで湖沼が広がっていたとみられる。

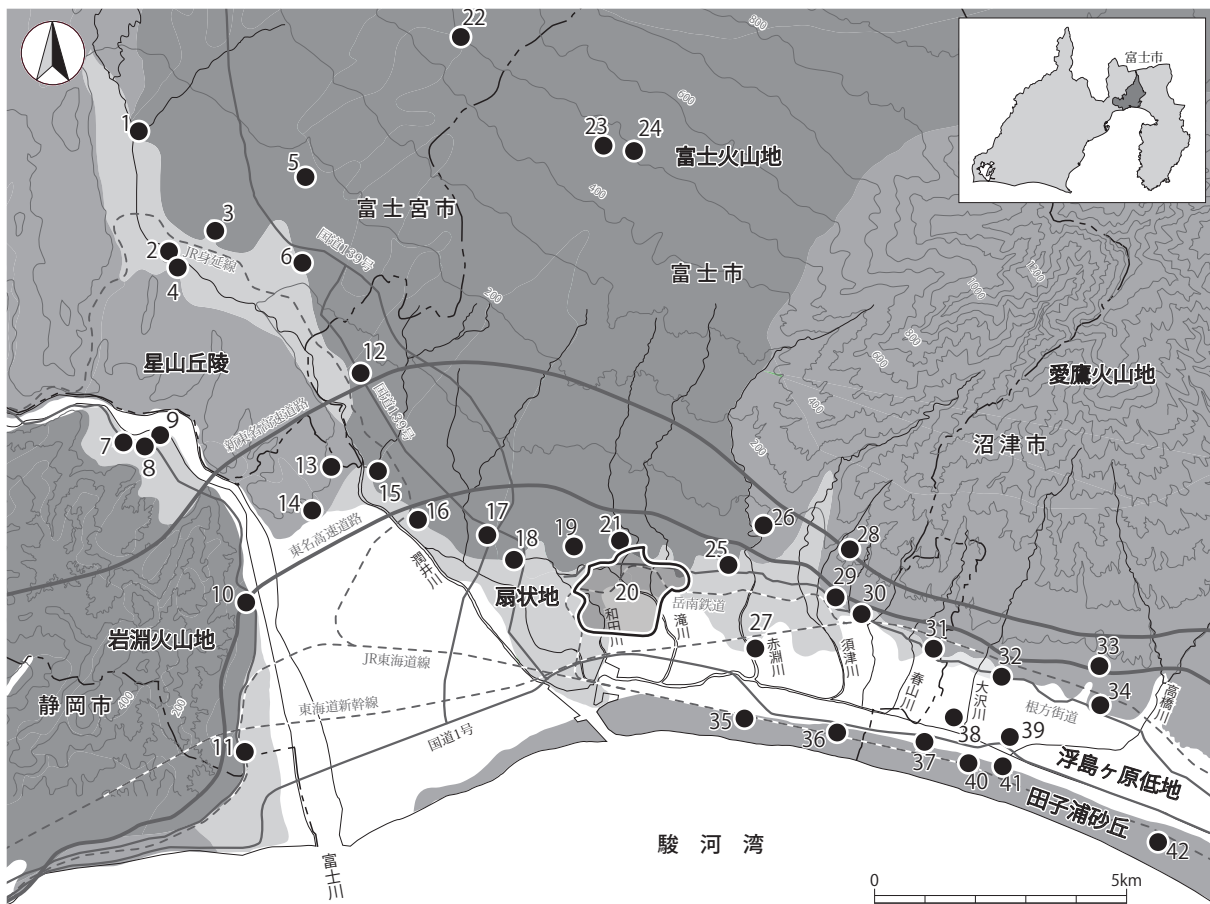
1 縄文・弥生時代の集落と湖沼利用

(1) 縄文時代の状況

微高地上の集落 縄文時代に係る沖田遺跡の出土品は、87・92次調査地点において報告されている⁽⁷⁾。図化した資料は限られるものの、中期後半の加曾利E3・E4式期から後期前半の堀之内式期が主体となるものと判断される。また、未報告ながらE地点出土の土器とされる縄文土器片が富士山かぐや姫ミュージアムに収蔵されており、こちらも中期後半から後期が主体となる土器片が顕著にみとめられる。以上の2地点はいずれも沖田遺跡内では標高の高い北端近くに立地しており、富士火山地を基盤とする丘陵がすぐ北側に迫った、現地表面標高5.0m以上の微高地上に立地している。沖田遺跡の北側の丘陵上には、宇東川遺跡や赫夜姫遺跡といっ

た、やはり中期後半から後期に盛行する集落跡が確認されていることから⁽⁸⁾、沖田遺跡の縄文集落についても丘陵上の集落と連動して営まれたものと判断されよう。

浮島沼の漁撈 そのような浮島沼周辺の集落の生業については、漁撈活動の比重が大きかったであろうと考えている。沖田遺跡では未発見ながらも、浮島沼北縁を臨む縄文集落のうち、宇東川遺跡⁽⁹⁾やコーカン畑遺跡⁽¹⁰⁾、的場遺跡⁽¹¹⁾などで漁網用とみられる石錘の出土がみとめられるほか、さらに北側の愛鷹山南麓の古木戸B遺跡⁽¹²⁾や赤淵川上流の峰山遺跡⁽¹³⁾でも同様の石錘の出土が確認されており、浮島沼内やその周辺河川において網漁が広く行われていた形跡が顕著である。沖田遺跡や宇東川遺跡が盛行する縄文時代中期以降には内湾が完全に閉塞・湖沼化し、水質も淡水化が進んでいたとみられることから、淡水魚や貝類を対象とした漁撈が行わ



1. 渋沢遺跡 2. 泉遺跡 3. 大宮城跡 4. 滝戸遺跡 5. 丸ヶ谷戸遺跡 6. 上石敷遺跡 7. 清水岩ノ上遺跡 8. 浅間林遺跡 9. 中野遺跡 10. 破魔射場遺跡・駿河山王遺跡 11. 大楽窪遺跡 12. 天間代山遺跡 13. 高德坊遺跡 14. 念信園遺跡 15. 沢東A遺跡 16. 中桁・中ノ坪遺跡 17. 東平遺跡 18. 三田市廃寺跡 19. 舟久保遺跡 20. 沖田遺跡 21. 宇東川遺跡 22. 村山浅間神社遺跡 23. 大坂遺跡 24. 岩倉A・B遺跡 25. 祢宜ノ前遺跡 26. 向山遺跡 27. 行僧遺跡 28. 平椎遺跡 29. 宮添遺跡 30. コーカン畑遺跡 31. 寺の上遺跡 32. 葱川遺跡 33. 閑峰遺跡 34. 古城遺跡 35. 三新田遺跡 36. 柏原遺跡 37. 下道遺跡 38. 雄鹿塚遺跡 39. 雌鹿塚遺跡 40. 中原遺跡 41. 鳥沢遺跡 42. 東畑遺跡

図1 弥生～奈良・平安時代の主要集落遺跡分布図

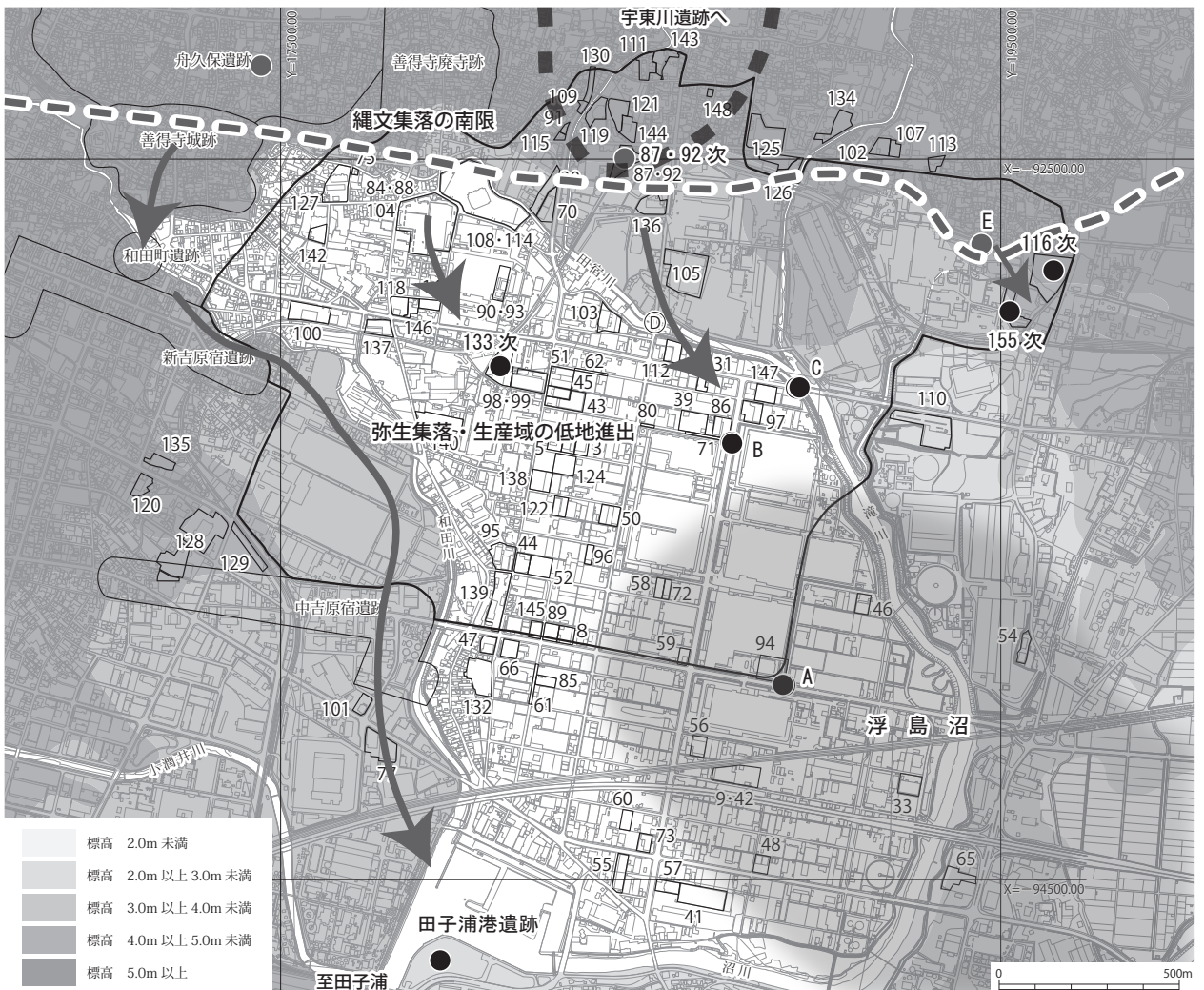
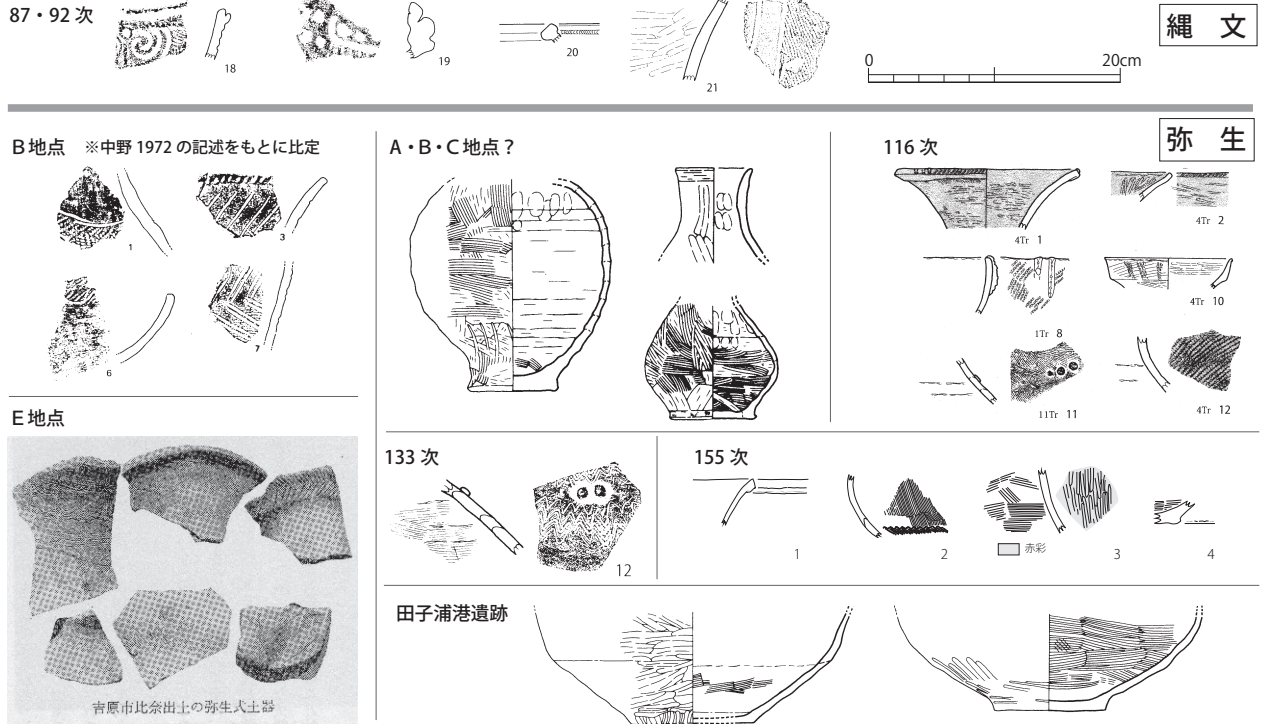


図2 沖田遺跡の展開 (縄文～弥生時代)

れていたであろう。時代は下り、大正期に浮島沼に生息していた魚介類をみると、貝類ではシジミ、カラス貝、魚類ではコイ、フナ、ナマズ、ウナギ、ドジョウ、エブリ、ボラ、ハヤ、ヤマコ、アユ、スズキ、甲殻類ではカニ、エビ、カメ、スッポンなどが多かったようであり⁽¹⁴⁾、水産資源の宝庫として、縄文期より浮島沼が利用されていたことが推察される。

(2) 弥生時代の状況

低地への進出 沖田遺跡の縄文集落が現地表面標高5.0 m以上の微高地上に立地していたと考えられたのに対し、弥生時代の集落は、現地表面の標高が2.0～4.0 m程度の低地部まで進出する。B地点出土と伝えられる土器片⁽¹⁵⁾は、早くに中野 国雄によって弥生時代中期の資料として指摘されたものであり、甕は口縁端部に刻みを施し、口縁部から体部にかけてへラ描沈線による横位の羽状条痕調整が認められるものを含む。壺は肩部付近とみられる破片があり、横位のへラ描沈線によって区画された縄文帯を有する。いずれも色調は灰褐色を呈し、愛鷹山麓や浮島沼周辺の遺跡出土品にみられる雌鹿塚期の土器の色調とは一線を画している。これらは、中期後葉の東駿河Ⅲ様式期⁽¹⁶⁾に相当する資料とみられる。弥生後期以降の雌鹿塚式期になると低地部も含めた遺跡範囲内の各所で土器の出土が報告されており、浮島沼沿岸へと集落や水田が進出したものと評価される。

水田稲作の普及と漁撈 駿河地域においては、中期中葉以降に大陸系磨製石器類や方形周溝墓群を有する新興集落が低地部に広がり、本格的な稲作農耕が開始されることが指摘されているが⁽¹⁷⁾、沖田遺跡においても、少なくとも中期後葉以降には小規模な水田稲作が開始されているものと評価しておきたい。本発掘調査によって弥生時代の水田跡と認定された遺構は未検出であるが、古墳時代の水田遺構と重複している可能性もあり、今後の調査進展によって当該期の水田が確認される可能性は十分にあるだろう。なお、中期後葉以降の土器も出土した浮島沼北岸の的場遺跡では、後期前半の雌鹿塚式期の竪穴建物跡から、大陸系磨製石器である扁平片刃石斧と伴に有頭石錘も出土している⁽¹⁸⁾。浮島沼沿岸部では、小規模水田による稲作が普及した一方で、縄文時代以来の漁撈も並行して行われていたと評価される⁽¹⁹⁾。

2 古墳時代の集落と湖沼利用

(1) 古墳時代の集落

集落の展開と拠点形成 古墳時代になると、遺跡範囲内に広く土師器の貯蔵具（壺）や甕（煮炊具）の出土が確認できるようになり、集落の規模も弥生時代以前に比べて拡大したことが推定される。竪穴建物跡などの明確な遺構は未発見であるが、出土した土器類からは古墳時代を通じて人の利用があったと考えられ、特に大廓式期（弥生終末期～古墳前期）にピークが認められる。

遺跡内には複数の集落のまとまりがあったことも想定される。1つ目は和田川と田宿川によって挟まれた一帯に占拠する一群であり、墳墓や装飾性の高い広口壺などが認められることから、遺跡内の中心的な集落と墓域であったと考えられる。133次調査⁽²⁰⁾では、地表下4 mから準構造船転用木棺と共に、面径6.35 cmを測る青銅鏡（珠文鏡）、滑石製勾玉、人骨・人歯が検出されており、埋没した古墳時代前期後半の低墳丘墓の存在が確認された。2つ目が遺跡範囲北東端の台地末端に占拠する一群であり、縄文・弥生時代以来の伝統的な集落域と考えられる。3つ目は遺跡範囲北端の台地末端に占拠する一群であり、こちらも縄文・弥生時代以来の伝統的な集落と認識されるが、さらに北側の台地上に占拠する宇東川遺跡へと至る経路上に位置する集落とも捉えられる。

災害と集落移転 これらの3つの群のうち、古墳時代後期まで継続して認められるのは伝統的な集落である遺跡北側の2つの群であり、低地部に展開した拠点・墓域とみられる群は、古墳時代中期後半以降、不明瞭になる。沖田遺跡内では古墳時代中期以降に、河川の氾濫が活発化したことが指摘されているほか⁽²¹⁾、富士川河口断層帯の活動を伴う大規模地震に由来する浮島沼の水位上昇・地盤の沈降も6～7世紀にあったことが想定されている⁽²²⁾。また、5世紀末頃には富士山の噴火による大淵スコリアが浮島沼西部一帯に降灰しており⁽²³⁾、自然環境に由来する不安定な状況が重なった結果、低地部の集落が放棄された可能性がある。

集落間構造の変化 古墳時代前期を中心とする集落間構造について、佐藤 祐樹は外来系土器の出土や集落規模から、宇東川遺跡を「拠点型集落」とする一方、その生産基盤を担った沖田遺跡を「低地占有型集落」・「交易拠点型集落」と捉え、両集落が有機的なつながりをもって展開したことを指摘している⁽²⁴⁾。互いに近接した丘陵上の集落と低地の集落が連動する枠組み自体は、湖沼での漁撈の比重が大きい縄文時代や、小規模水田稲作が

133次

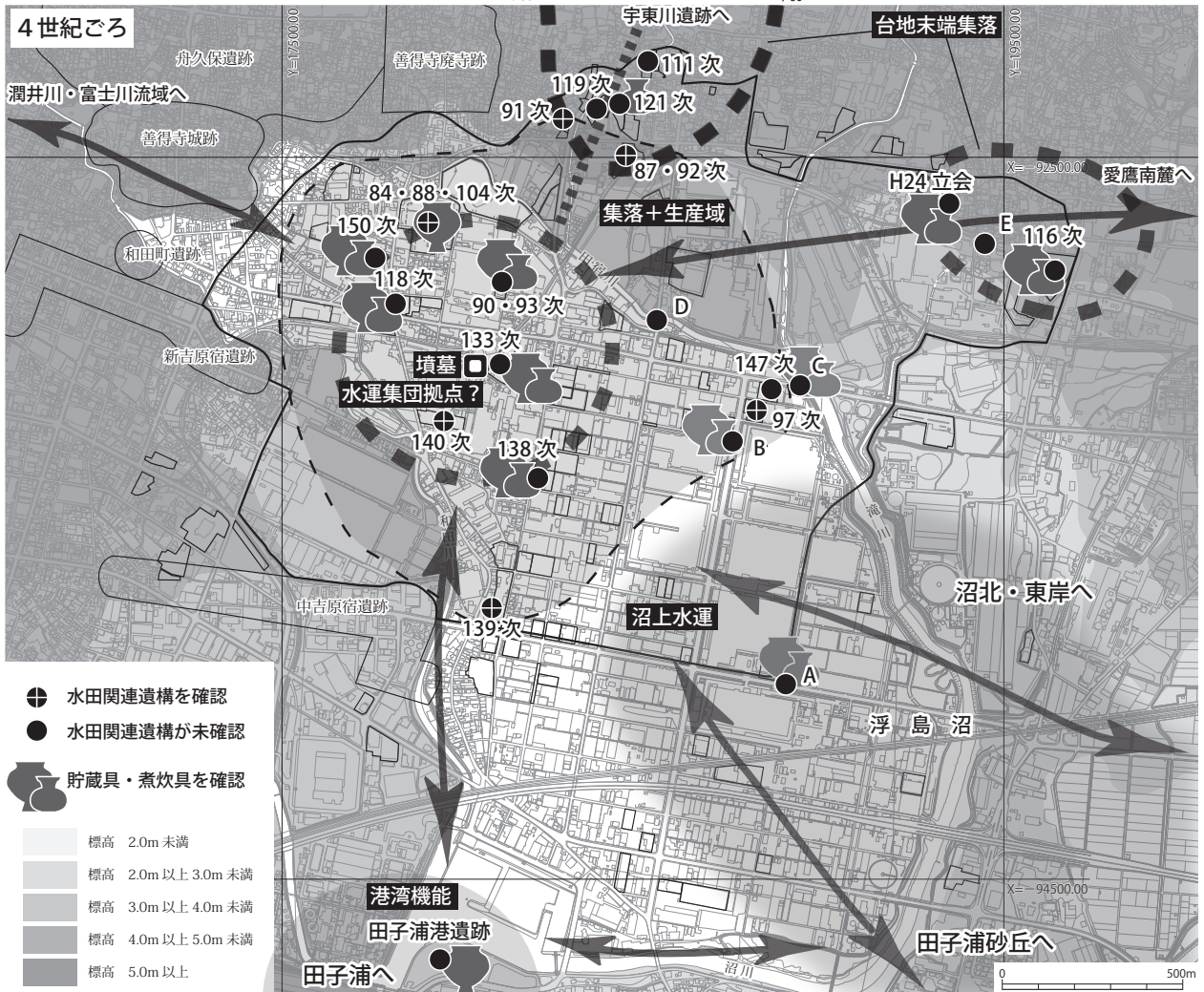
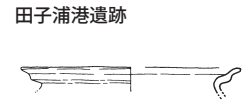
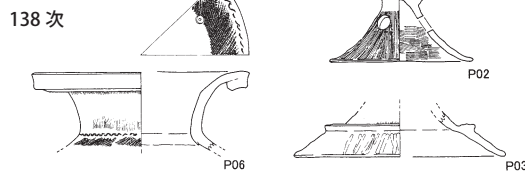
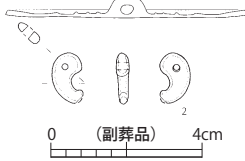
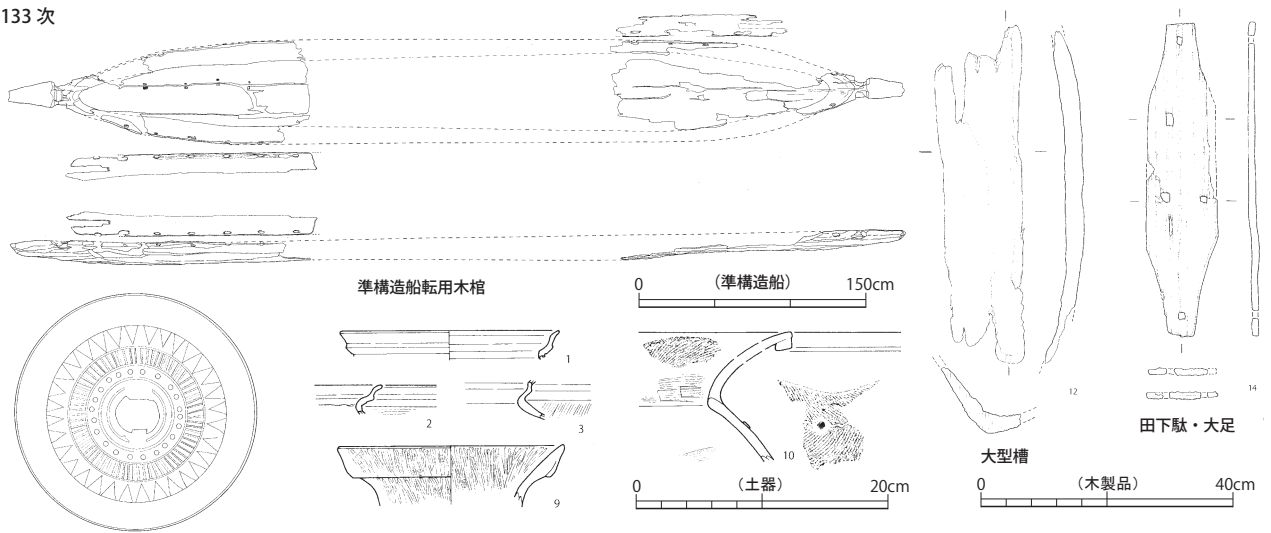


図3 沖田遺跡の展開 (古墳時代①)

広まる弥生時代後期にも少なからず認められたであろうことが想定できるが、古墳時代以降には、後述する水上交通路の整備によって、そのネットワーク間を往来するモノや情報の質・量が飛躍的に向上したことが推定される。

(2) 湖沼利用

小規模水田の展開 古墳時代の水田畦畔や関連する堆積層が、遺跡内の広範囲で確認されている。多くは確認調査による土層上での検出であるが、87・92次調査では本調査によって水田遺構が狭小ながら面的に確認されている(図6)⁽²⁵⁾。検出された畦畔はN-24°-Eを指向し、南北規模が15m以上、低部幅が0.7mを計り、杭や木材を伴わない盛土小畦畔であった。東西方向に直行する形で6条のさらに小規模な畦畔が接続し、小区画を形成している。個々の区画の規模が小さいことは、造成や修築、水の出し入れなどを容易に行うことが可能であ

り、維持管理の労力・人工が少なくて済む。遺跡内での分布状況を見ると、煮炊具などを出土する地点と水田関連遺構がモザイク状に入り乱れており、後述する奈良・平安時代に煮炊具が遺跡範囲の大部分から姿を消す状況と比べると、一線を画している。おそらくは古墳時代の沖田遺跡の水田は、集落に近接する形で展開し、いずれも小規模であった蓋然性が高い。なお、水田農耕に関わる木製品として、大型槽や田下駄あるいは大足、杵などが133次調査やA～C地点、D地点の調査で検出されている。

水上交通路の整備 水田経営が多くの人工を一齐に投入するような大規模なものではなかったとするならば、古墳時代前期の沖田遺跡の集団が小型青銅鏡を副葬する墳墓を築くまでに成長を果たした要因は、どこに求められるのであろうか。本稿では、浮島沼とその周辺を利用した水上交通路の整備が当該期に達成されたことを重視しておきたい。岩本 貴は、浮島沼東岸に3世紀中頃に

A・B・C地点

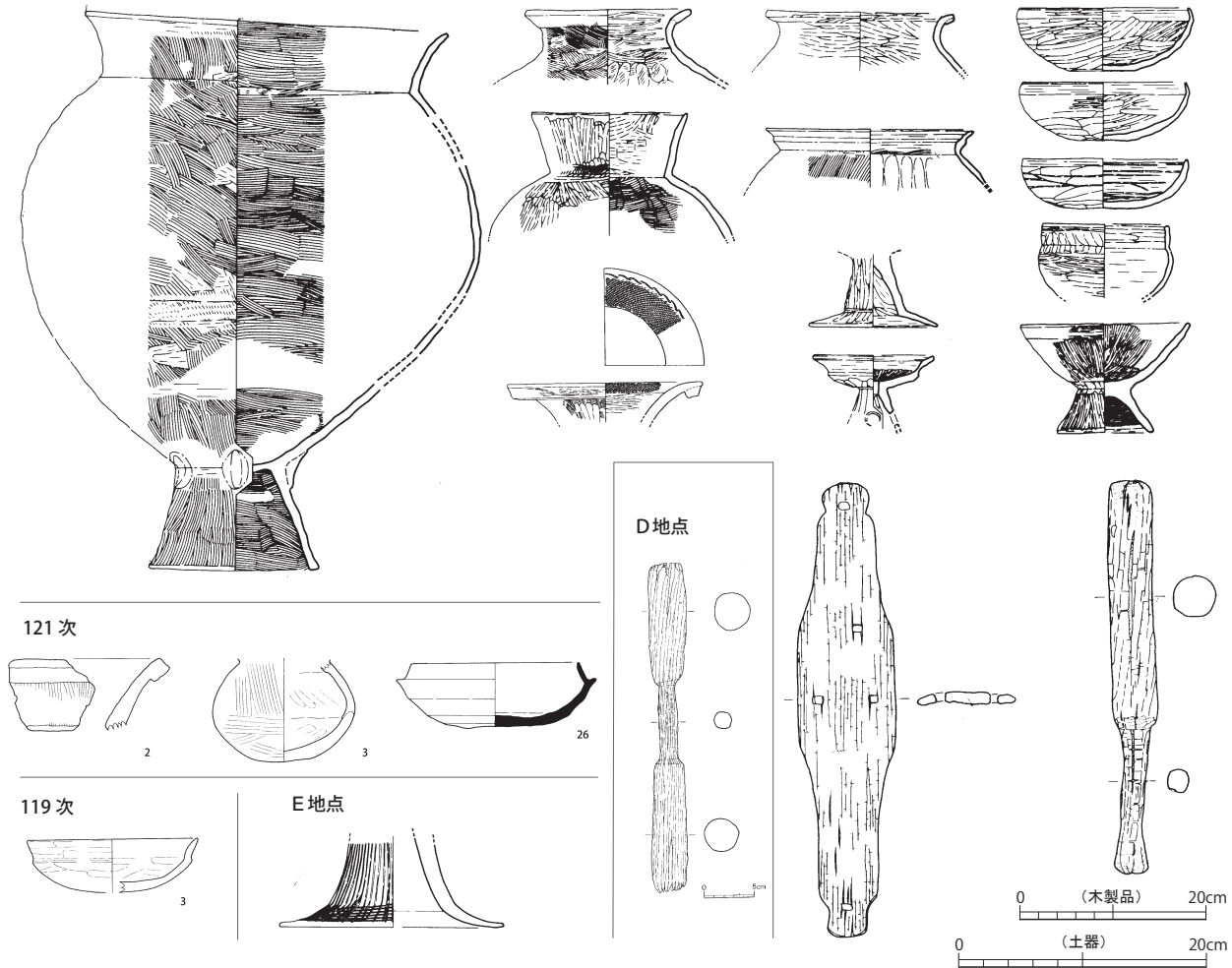


図4 沖田遺跡の展開(古墳時代②)

築かれた高尾山古墳被葬者を擁立した集団について、東海西部系に北陸系・近江系が加わる外来系土器の保有状況が高尾山古墳を含めた浮島沼周辺の集落に集中する現

象から、浮島沼周辺の地域集団に求めている⁽²⁶⁾。また佐藤 祐樹はそのような外来系土器の入手ルートについて、太平洋から外洋船によって吉原ミナト (田子浦港遺

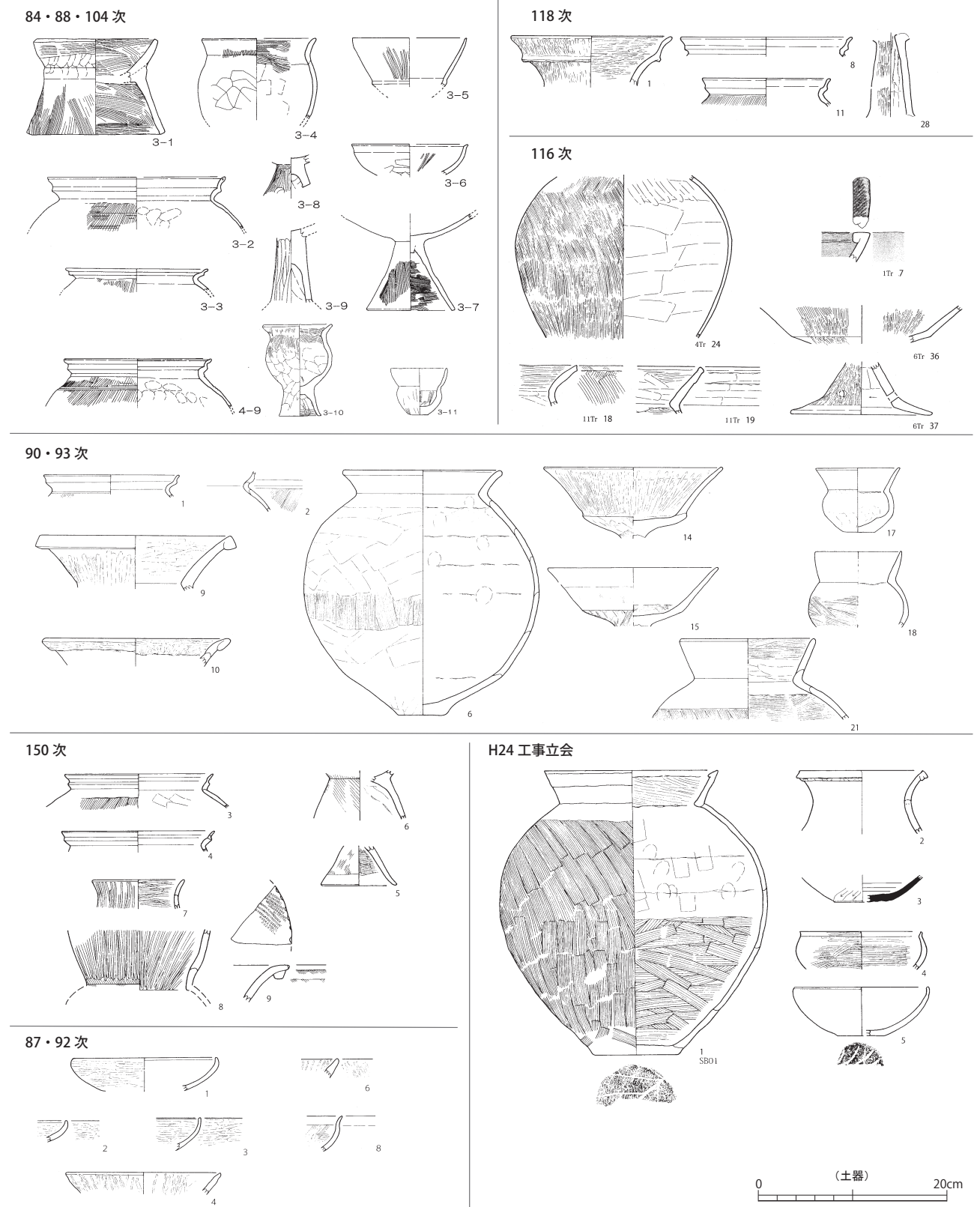


図5 沖田遺跡の展開 (古墳時代③)

87・92次

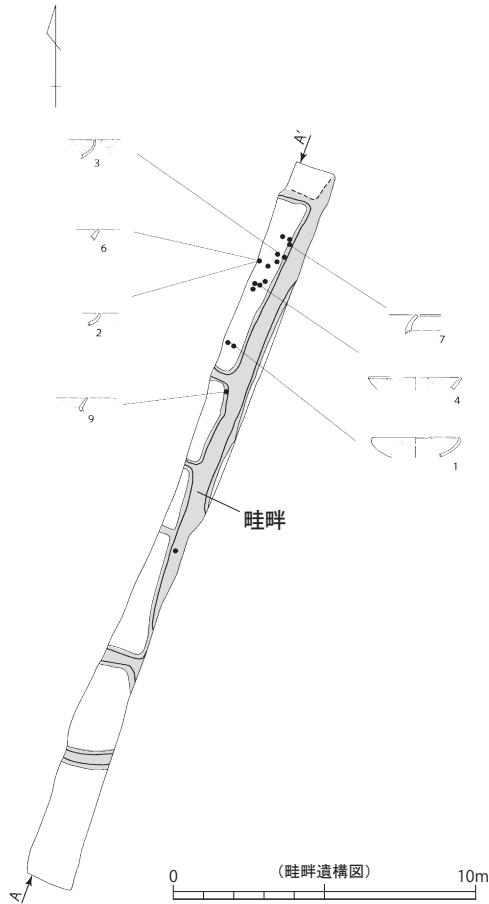


図6 沖田遺跡の展開（古墳時代④）

跡周辺)に運ばれ、そこから小型船に乗せ換え、浮島沼西岸の宇東川遺跡周辺から東岸の高尾山古墳周辺まで運ばれたとして、その際、沖田遺跡が浮島沼水運網の玄関口としての役割を果たしたことを指摘している⁽²⁷⁾。

133次調査で見つかった準構造船は、低い舷側板と浅い船底を有し、浮島沼や周辺の河川のような浅瀬に適した構造と考えられる⁽²⁸⁾。船体全体の厚みが薄く、多くの物資を輸送するには適さない、現代のカヌーを彷彿とさせるその繊細な仕上がりは、軽量で高価な物資や情報などを高速で輸送した船であった可能性もある⁽²⁹⁾。そのような準構造船を転用した棺の被葬者は、古墳時代前期後半に当該水運を実務的に担った指導者層と目される。その前段階である古墳時代前期初頭の高尾山古墳築造前後には、吉原ミナト―浮島沼周辺で外洋船と小型船を組み合わせた水上交通網が既に形成されていたのであるが、前期後半に浮島沼水運網がさらに成熟したことで、その実務を担った集団から青銅鏡を副葬する指導者層を輩出するまでに至ったと考えたい。沖田遺跡の墳墓

に埋葬されたような水運指導者層を掌握した首長層については、浮島沼の東～中央部や駿河湾からの視認性が高い墳丘を有し⁽³⁰⁾、前期後半に相次いで築造されたとみられる浅間古墳・東坂古墳の被葬者が想定されよう。

3 奈良・平安時代の集落と湖沼利用

(1) 奈良・平安時代の集落

集落の縮小 奈良・平安時代には、沖田遺跡の集落の様相は変化をみせるようであり、煮炊具などの土器類や遺物自体の出土数が大きく減少する。出土する地点も遺跡の北側の丘陵末端・微高地上に集中するようになり、現状では低地部に集落的な要素は認められない。平安時代の9・10世紀には、甕などの出土する割合と比べて、「富」など吉祥句が墨書された灰釉陶器などの椀類の出土数が多いことは、集落ではなく、祭祀場所として利用された遺跡も多かった可能性がある。遺跡北側の高台に位置する宇東川遺跡は、奈良・平安時代も依然としてこの地区の拠点的な集落であり、沖田遺跡の集落としての機能は、宇東川遺跡や他の周辺の集落に分散・解消された可能性もある。

街道の整備と陸路の重視 奈良時代になり、富士山南麓地域が駿河国富士郡として管理されるようになると、郡家が置かれた東平遺跡周辺に政治・宗教・交易機能を集約させることを目的に、郡内集落の再編が加速する⁽³¹⁾。富士郡を通過する街道はすべて東平遺跡周辺を通るように配備されるなかで、沖田遺跡と宇東川遺跡の間を東西に抜ける形で、根方街道が存在する。根方街道は浮島沼の北縁・愛鷹山麓の南裾を東西に通る街道であり、少なくとも弥生時代後期以降にはこの陸路を意識して集落が立地するようになったと考えられている⁽³²⁾。沖田遺跡の当該期集落が遺跡の北側に集中することは、改めて根方街道を意識した構造に再編されたことを示すのであろう。平安時代以降に郡家の求心力が低下して以降は、交易拠点として再び盛行を遂げる宇東川遺跡と共に、後述する条里型水田の管理機能の比重が一層高まったと推測されよう(図8)。一方、古墳時代前期に特に盛行した浮島沼水運網は、奈良時代以降に浮島沼北岸の根方街道や、南岸の東海道が重視される中で、その役割が相対的に低下した可能性がある。

(2) 湖沼利用

条里型水田の形成 沖田遺跡の奈良・平安時代集落が低調となる一方で、水田関連遺構は遺跡範囲内に広く検

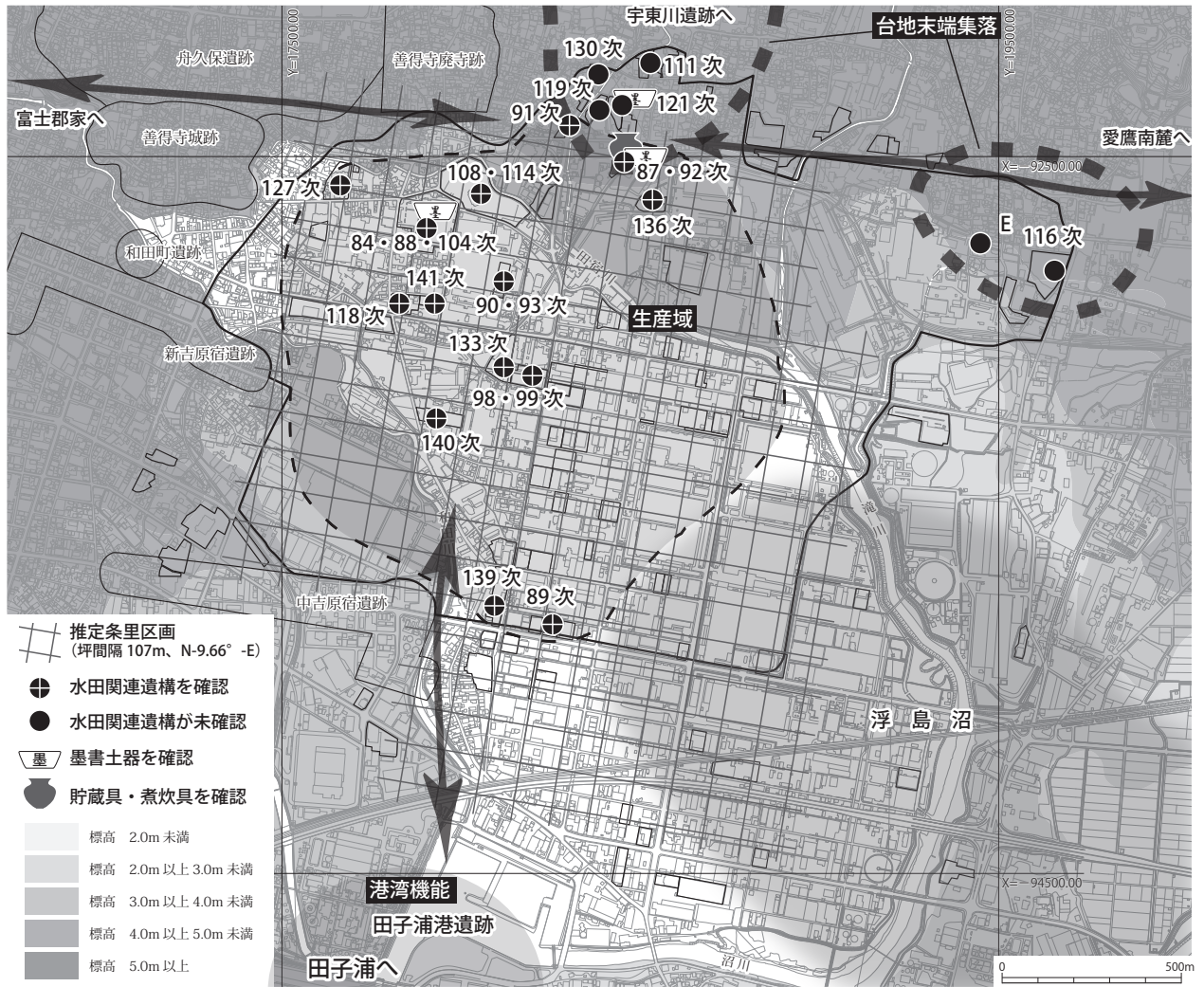
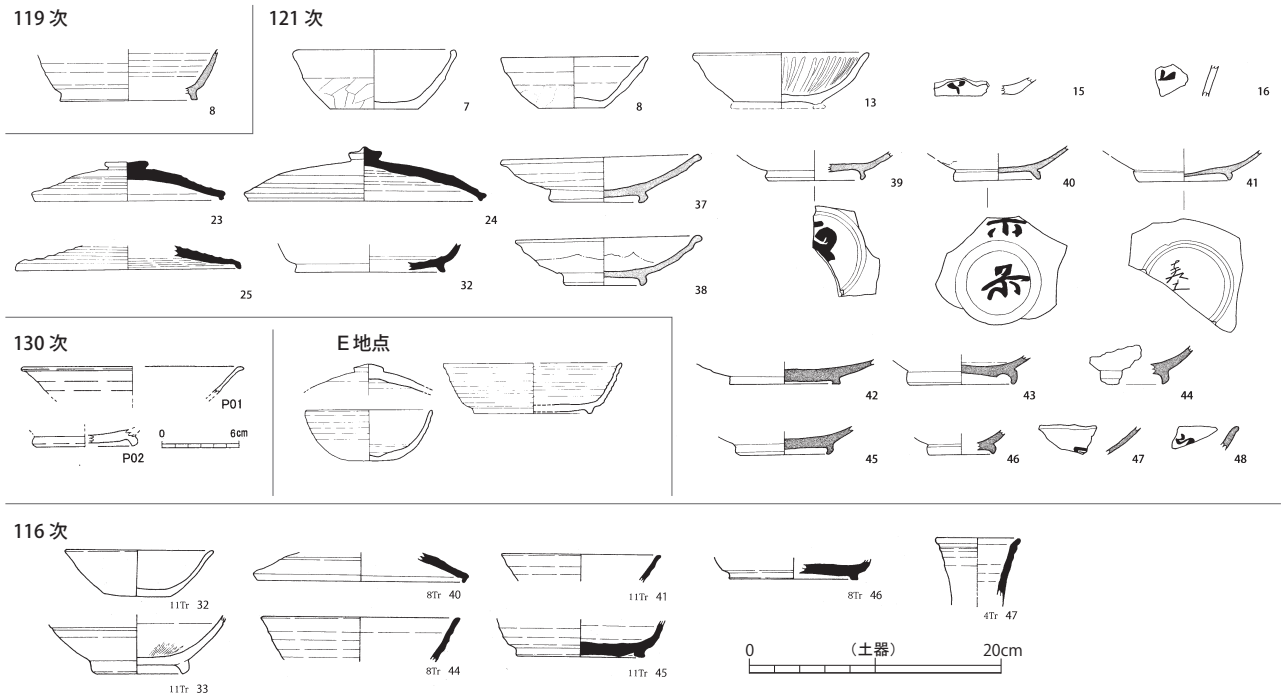
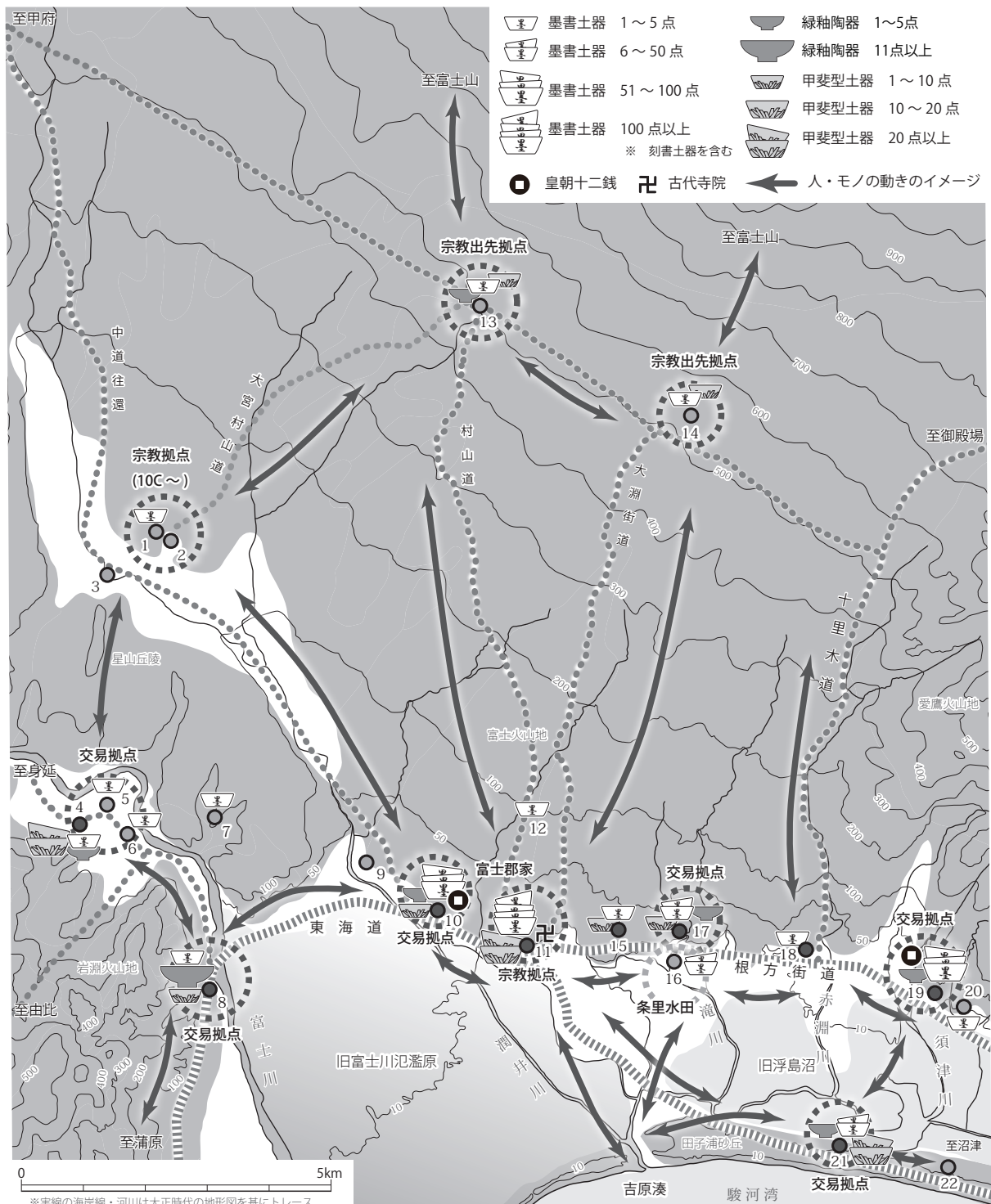


図7 沖田遺跡の展開 (奈良・平安時代①)

出されるようになる。84・88・104次調査では、東西方向と南北方向の大畦畔が一本ずつ検出されている⁽³³⁾。大畦畔は底部幅が5.6m以上となる大きなもので、頂部には幅1.06mの東西方向の水路が掘られていた。この

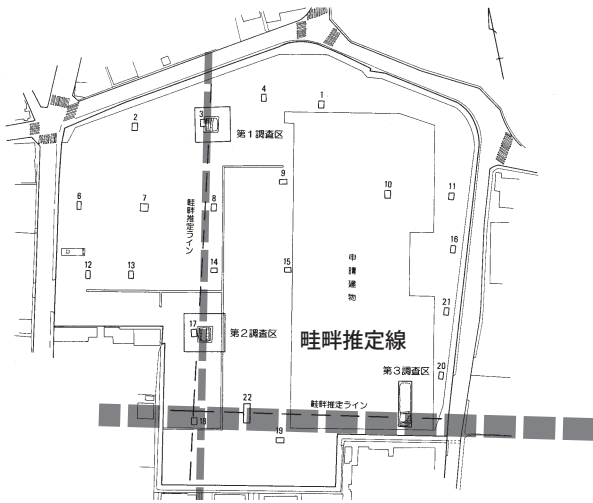
水路内堆積物から得られた珪藻化石群種やイネ属珪酸体から、常に水が流れていた灌漑用水路であったと評価されている⁽³⁴⁾。畦畔は盛土主体で築かれているが、基底には構築材とは認めがたい杭が2本、東西方向に打た



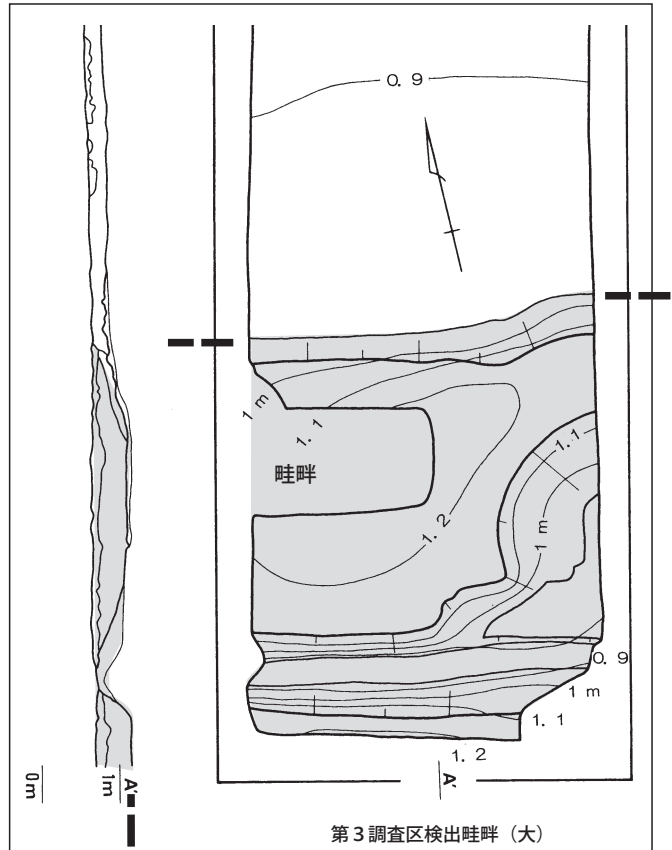
1. 浅間大社遺跡 2. 大宮城跡 3. 泉遺跡 4. 浅間林遺跡 5. 中野遺跡 6. 中野石切場遺跡 7. 初田遺跡 8. 破魔射場遺跡 9. 沢東A遺跡
10. 中桁・中ノ坪遺跡 11. 東平遺跡 12. 横沢古墳 13. 村山浅間神社遺跡 14. 岩倉B遺跡 15. 舟久保遺跡 16. 沖田遺跡 17. 宇東川遺跡
18. 祢宜ノ前遺跡 19. 宮添遺跡 20. コーカン畑遺跡 21. 三新田遺跡 22. 柏原遺跡

図8 平安時代前期～中期の富士郡景観

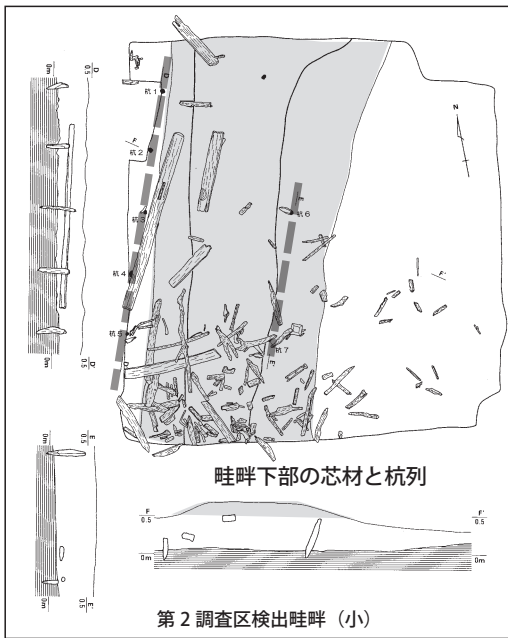
84・88・104次



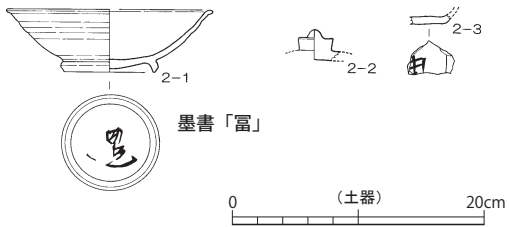
調査区全体図



第3調査区検出畦畔(大)

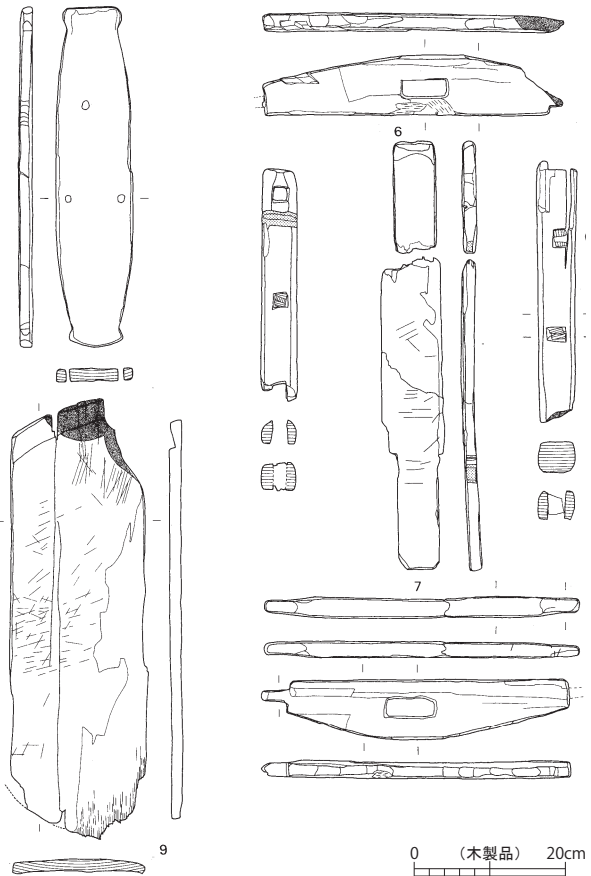


第2調査区検出畦畔(小)



墨書「富」

(土器) 20cm



(木製品) 20cm

図8 沖田遺跡の展開 (奈良・平安時代②)

87・92次

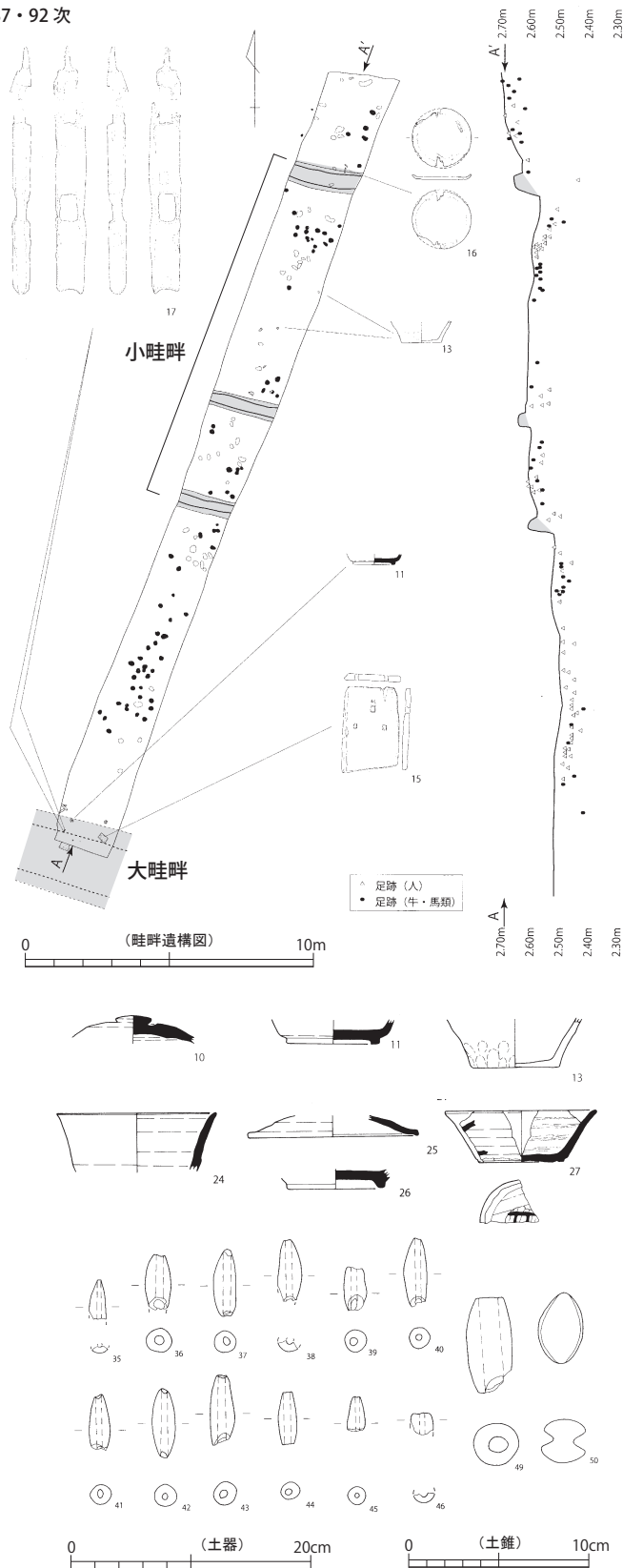


図9 沖田遺跡の展開 (奈良・平安時代③)

れており、盛土工前段階の割付用杭であった可能性もある。盛土上面には838年噴出の神津島天上山テフラが検出されていることから、少なくともその年代までは畦畔として機能していたことは明らかである。一方、南北方向の畦畔は底部最大幅2.84mを測り、下部には芯材として利用された建築材や農具、雑木が検出されたほか、割付用あるいは盛土補強用とみられる杭列が2本確認されている。また、87・92次調査では東西方向の大畦畔の一部と、小畦畔3本検出されている⁽³⁵⁾。このほかにも、確認調査によって壁面上で検出された当該期の畦畔や水田耕作土なども含めると、遺跡の広範囲にわたって水田が広がっていたことが想定される。

調査で検出された畦畔や昭和8年発行の『静岡県富士郡今泉村地番反別入地図』を参考に、条里型水田の復原が若林美希らによって試みられており⁽³⁶⁾、それによると南北軸がN-9.66°-E、坪間隔は駿河中部の川合遺跡・瀬名遺跡(静岡市)⁽³⁷⁾と近似する107mの値が現状では整合性が高いとされる。この条里型水田がどの範囲まで拡がるかについては不確かな部分が多いが、近代以降の水田や土地区画とも合致する部分が多い点は若林も指摘するところであり、遺構としては未確認ながらも、南は沼川付近にまで広がっていた可能性もある。東西については、近代の区画を考慮しても、おおよそ和田川から滝川までの範囲に収まる規模ではないだろうか。北は現状で古代の水田遺構を検出している、91次調査地点の周辺までと判断しておきたい。

奈良・平安時代には、沖田遺跡の集落が縮小して根方街道に面した丘陵端部に集約される一方で、低地部には最新式の条里区割を採用することで、弥生～古墳時代には見られなかった大規模な水田が営まれたのである。

おわりに

以上、先行研究に導かれながら、縄文時代から平安時代までの浮島沼西岸の沖田遺跡にみられた集落や湖沼利用の変遷を概観してきた。縄文時代は、特に中・後期に丘陵上の大規模な集落であった宇東川遺跡の盛行と連動して、遺跡北端の丘陵端部・微高地上に集落が存在したとみられる。おそらくは縄文時代前～中期頃に浮島沼が完全に湖沼化・淡水化して以後、縄文人による湖沼内での漁撈活動が活発化

したことにより、湖沼に面した沖田遺跡に進出したものと推定されよう。弥生時代には、遅くとも中期後葉には沖田遺跡の低地部に集落が成立したと推定した。水田農耕の導入と共に、沖田遺跡においても小規模な水田経営が広まったと考えられる。水田農耕に従事した一方で、漁撈の比重も大きかったと評価した。古墳時代には伝統的な丘陵端部・微高地上の集落のほか、特に前期から中期初頭には低地部の集落も大きなまとまりをみせるようになり、後者に拠点的な機能があった可能性を指摘した。低地部の集落では周辺で小規模な水田経営が行われた一方で、外洋と接続する田子浦港遺跡（後の吉原湊）や浮島沼の周縁地域を準構造船などで結ぶ水上交通網が当該期に発達したことにより、それらを実務的に管理する水運集団の拠点や墓域になっていったと考えた。ただ、低地部の集落は中期以降に水害や富士山の降灰、大規模地震による地盤の沈下と水位上昇などの災害を被ったために、後期以降は衰退したと評価した。奈良・平安時代には郡家を中心とする集落の再編によって改めて根方街道に面した遺跡北端に集落機能は集約され、低地部には大規模な条里型水田が展開したことを確認した。

沖田遺跡の調査は近年大きく蓄積された一方で、その検出面があまりにも深いことから、大規模な発掘調査がほとんど行われておらず、遺跡の認知度は極めて低い。個々の調査の小さな正報告が多岐にわたっていることで、条里型水田の問題を除くと、これまでにほとんど総括されてこなかったことにも一因があるだろう。そのような問題意識のもと、沖田遺跡における情報量の多かった調査を改めて集成し、通史的に概観したのであるが、限られた資料による問題はあるものの、各時代の一定の評価や今後の調査における羅針盤的役割は果たせたのではないだろうか。古墳時代の準構造船の発見は、この遺跡の地下には我々が想像もしなかったような資料が未だ人知れず息をひそめていることを実感させてくれる。低地開発や生業、災害、水上交通など、沖田遺跡の調査成果によって今後少しずつ明らかにされるであろう問題は非常に多い。本稿がそのような研究の一里塚となれば、望外の喜びである。

謝辞

本稿は、平成 27 年 9 月 5 日（土）に静岡市立登呂博物館で開催された企画展関連講座「湿原に生きる豊かな知恵」において、筆者が「富士の湿原に生きる一発掘調査からみた浮島沼西岸の様相」と題して発表した内容の一部を再構成したものである。貴重な機会を与えていただきました登呂博物館の皆様、厚く御礼

申し上げます。

註

- (1) 松原 彰子「駿河湾奥部沖積平野の地形発達史」『地理学評論』57 (1)、pp37-56、1984 年、など。
- (2) 平成 23 年度までの調査履歴一覧は、以下の文献に整理されている。佐藤 祐樹・若林 美希「沖田遺跡の調査」『富士市内遺跡発掘調査報告書 - 平成 22・23 年度 -』富士市教育委員会、pp153-176、2013 年。
- (3) 中野 国雄「浅間古墳とスルガの国」『吉原市史 上巻』富士市、p141-284、1972 年。
- (4) 前田 勝己ほか『沖田遺跡』富士市教育委員会、pp40-42、2000 年。
- (5) 註 2 文献、pp154-161。
- (6) 註 2 文献、p175。
- (7) 佐藤 祐樹・服部 孝信『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会、pp59-106、2012 年。
- (8) 佐藤 祐樹・若林 美希ほか『宇東川遺跡 A 地区』富士市教育委員会、2012 年、など。
- (9) 註 8 文献。
- (10) 佐藤 祐樹ほか『富士市内遺跡発掘調査報告書 - 平成 24・25 年度 -』富士市教育委員会、pp139-168、2015 年。
- (11) 志村 博『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』富士市教育委員会、pp106-110、1986 年。
- (12) 岩本 貴『天ヶ沢東遺跡 古木戸 A 遺跡 古木戸 B 遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 228 集（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所、pp103-177、2010 年。
- (13) 註 11 文献、pp82-83。
- (14) 鈴木 富男『はばたく浮島ヶ原』富士東部土地改良区、p15、1993 年。
- (15) 註 3 文献、pp178-184。註 11 文献、p85。『吉原市史』報告では、「沖田 A 遺跡」の地表面より 7.4m より出土した土器が、中期後葉の有東式であるとしている。『吉原市史』での「A 遺跡」の場所は、挿図から判断するに、註 11 文献（『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』）以降に発行された富士市の埋蔵文化財関連報告書に示される沖田遺跡 B 地点にあたることから、本稿でも B 地点出土資料として扱っている。
- (16) 佐藤 由紀男ほか「遠江・駿河地域」加納 俊介・石黒 立人編『弥生土器の様式と編年一東海編一』木耳社、pp.661-700、2002 年。
- (17) 小泉 祐紀「駿河中期中葉とその前後の土器」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流 - 稲作導入期の社会 -』地域と考古学の会、pp61-72、2017 年。中川 律子「遠江駿河伊豆の生産用具」『同上』、pp.91-98、平野 吾郎「遠江・駿河における弥生時代の墓制の変化」『同上』、pp123-138。
- (18) 小野 真一ほか「的場遺跡」『東海道新幹線静岡県内工事に伴

- う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県文化財調査報告書 第6集、静岡県教育委員会、pp19-31ほか、1965年。
- (19) 浮島沼南岸の雌鹿塚遺跡でも、弥生後期の有頭石錘が出土している。(石川 治夫『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』沼津市教育委員会、1990年。)なお、浮島沼での漁撈活動は87・92次調査の土錐の出土によって、奈良・平安時代にも継続されていたことが確認でき、各時代を通じて水田経営などと並行して漁撈も行われていたとみられる。
- (20) 註2文献。
- (21) パリノ・サーヴェイ株式会社「沖田遺跡(第1次調査区)の自然科学分析」『沖田遺跡』富士市教育委員会、pp47-78、2000年。
- (22) 藤原 治・澤井 祐紀ほか「静岡県中部浮島ヶ原の完新世に記録された環境変動と地震沈降」『活断層・古地震研究報告』No.7、pp ◆ - ◆、2007年。
- (23) 藤村 翔『富士山の下に灰を雨らす一富士の噴火と古墳時代後期の幕開け一』富士市立博物館第53回企画展図録、富士市立博物館、2014年。
- (24) 佐藤 祐樹「高尾山古墳周辺における集落の動態と古墳築造の背景」『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第104集、沼津市教育委員会、pp159-166、2012年。佐藤 祐樹「古墳時代について」『弥生ノ前遺跡』富士市教育委員会、pp55-64、2008年。佐藤 祐樹「集落の動態からみた古墳出現前後の富士山麓」『静岡県考古学研究』No.41・42、pp119-132、2010年。
- (25) 註7文献。
- (26) 岩本 貴「東駿河～伊豆北部の外来系土器について」『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第104集、沼津市教育委員会、pp167-180、2012年。
- (27) 註24、(佐藤2012)文献。
- (28) 資料を実見された山田 昌久氏(首都大学東京)、柴田 昌児氏(愛媛大学)の御教示による。
- (29) 資料を実見された松井 哲洋氏(和船研究会・海事史学会)の御教示による。なお、松井氏は障害物の多い浅瀬ではむしろ華奢な船体は不向きであり、外洋で運用された可能性も十分にありと指摘する。
- (30) 佐藤 祐樹「駿河における前期古墳—古墳の景観と路の視点から—」『シンポジウム』東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』第17回 東北・関東前方後円墳研究大会 発表要旨資料、pp27-52、2012年。
- (31) 佐野 五十三「駿河国富士郡における8世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』No.40、静岡県考古学会、pp271-284、2008年。藤村 翔「富士郡家関連遺跡群の成立と展開～富士市東平遺跡とその周辺～」『静岡県考古学研究』No.45、静岡県考古学会、pp53-66、2014年。
- (32) 註24、(佐藤2010)文献など。
- (33) 註4文献。
- (34) パリノ・サーヴェイ株式会社「沖田遺跡(第二次調査)の自然科学分析」『沖田遺跡』富士市教育委員会、pp81-106、2000年。
- (35) 註7文献。
- (36) 註2文献。
- (37) 栗野 克己・矢田 勝「延長約4kmにわたる律令期の埋没条里遺構の発見」『研究所報』No.45、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、1993年。

図版の出典

- A～E地点・田子浦港遺跡：志村 博 1986『富士市の埋蔵文化財(遺跡編)』富士市教育委員会、E地点写真：註3文献。
- 84・88・104次：前田 勝己ほか2000『沖田遺跡』富士市教育委員会
- 87・90・92・93次：佐藤 祐樹・服部 孝信 2012『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 111～118次：藤村 翔・若林 美希 2012『富士市内遺跡発掘調査報告書-平成11・12年度-』富士市教育委員会
- 119～122次：藤村 翔・若林 美希 2011『平成13年度 富士市内遺跡・伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 128～138次：若林 美希 2008『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 133次(遺物)：佐藤 祐樹ほか 2013『富士市内遺跡発掘調査報告書-平成22・23年度-』富士市教育委員会
- 150次・H24工事立会：若林 美希ほか 2015『富士市内遺跡発掘調査報告書-平成24・25年度-』富士市教育委員会
- 155次：佐藤 祐樹・伊藤 愛・若林 美希 2016『富士市内遺跡発掘調査報告書-平成28年度-』富士市教育委員会

平成 28 年度 博物館職員

館長	木ノ内 義 昭
主幹	齋 藤 俊 之
主 査 (学芸員)	高 林 晶 子
主 査 (学芸員)	瀧 浪 和 美
主 査 (学芸員)	井 上 卓 哉
上席主事 (学芸員)	藤 村 翔
主 事 (学芸員)	杉 本 寛 郎
臨時職員 (指導員)	久保田 英 聖
臨時職員 (管理員)	宇佐美 和 代
臨時職員 (事務補助)	金 刺 才 己
臨時職員 (事務補助)	土 屋 麻由美
臨時職員 (調査員)	山 本 倫 弘

富士山かぐや姫ミュージアム 館報

第 32 号 (平成 28 年度)

編集・発行 富士山かぐや姫ミュージアム (富士市立博物館)

〒 417-0061 静岡県富士市伝法 66 - 2

TEL 0545(21)3380

FAX 0545(21)3398

E-mail : museum@div.city.fuji.shizuoka.jp

URL: <http://museum.city.fuji.shizuoka.jp>

発行日 平成 29 年 8 月 31 日

印刷 文光堂印刷株式会社